

News
SCAN

社会・知的財産・投資

レポート

ニューススキャン

“知財村”を粉砕する勢力が仕切り
知財学会が初の研究発表会を開催

日本知財学会（会長：軽部征夫 東京工科大学教授）が5月24日と25日の両日、東京工業大学で「第1回学術研究発表会・シンポジウム」を開催した。産官学から約700人が参加する盛況な討論会となった。

“知的財産に関する学会”と聞くと、特許庁や特許事務所、企業の知的財産部の専門職法律家たちが討論する場をイメージするかもしれない。実際、従来は知的財産制度などに関する議論はこうした専門家たちが行ってきた。これら専門家が属するコミュニティは、高い専門性と閉鎖的な雰囲気を持つことから“知財村”と呼ばれ、そのことが知財を一般の人に取っ付きにくいものにしてきた。

だが、第1回の実行委員会を取り仕切ったのは、知財村の陣営ではなく逆に知財村を“粉砕”しようとする勢力。具体的には、産学連携や技術移転、自然科学、金融が専門ながら、知財にも一家言ある異人種たちで、2000年ごろから積極的に活動している「ビジネスIPR*」や「知的財産マネジメント研究会*」といった勉強会メンバーだ。

価値算出に会計的手法を検討 医療行為特許の是非も議論

“人種”の構成を反映して、講演や発表の内容は産学連携・ベンチャーから、知財会計・経営、国際問題、人材育成、知財制度戦略構想、著作権ビジネス、先端医療・ライフサイエンスなどまで多岐にわたった。

知財が学際分野であることを象徴するゲストが、財務コンサルティング会社であるKPMGフィナンシャルの木村剛社長。「経営戦略と知財価値」というパネルディスカッションに登場した木村社長は、「知財分野は素人」と断りつつ、「会計的なアプローチによって、知財の相応の価値を算出できれば、も

っと流通する」と主張。会計的なアプローチによる価値算出については、学術研究発表会の中でも数多くの発表があり、学際的な議論の場が必要であることを改めて印象付けた。

個々の技術分野では、唯一ライフサイエンスの分野だけが独立

して取り上げられた。バイオ関連事業には特に知財が重要であることを反映した格好だ。

パネルディスカッション「先端医療と知財」では、東海大学の黒川清・総合研究所長（東海大学教授）や大阪大学大学院医学研究科の森下竜一教授（アンジェスMG取締役）らがスピーチ。黒川教授は、「ITベンチャーは学生でも起業できるが、バイオベンチャーには試験のデータが必要なので、独立したグループを率いている助教授や教授でないと起業が難しい。しかもシーズは90%が大学にある」として、大学発ベンチャーの本命がバイオである旨を指摘した。また、パネルディスカッションで、懸案となっている医療行為特許の是非に話題が及ぶと、パネラーは一律に「特許の対象にすべし」と強調した。

「知財会計・経営」を中心に熱心に討議を聞いていた経済産業省の小宮義則・知的財産室長は、「レベルの高い発表があった。鋭い質問を飛ばす質問者もいた。彼らの中からリーダーが育つ感触を得た」と感想を語った。

知財関係者は「今ほど知財関係者が脚光を浴びたことはなかった」と喜ぶ一方、「単に一時的な知財ブームではないか」と冷めた見方もあった。第2回は2004年6月を予定している。（篠原 司＝日経BPコンサルティング）



知財学会の会場風景のひとつ。知財教育用ツールの「知財ゲーム」をビジネスIPRが開発し、エデュケーショナルセッションの中で発表した

ビジネスIPR

“知の時代の開拓者として最先端の情報と人材を発信すること”を目的とし、設立されたNPO（非営利団体）。2000年7月設立
<http://www.business-ipr.org/>

知的財産マネジメント研究会

知財学に触れる機会の提供、関連職人材との交流、技術流動成功モデルの共有の場を提供すべく、東京大学先端科学技術研究センターにおいて開催されている研究会。2000年4月設立
<http://www.smips.rcast.u-tokyo.ac.jp/>

つ、知財の相心の価値を昇中できれば、も いる。 (藤原 町=ロビBPコンサルティブ) いる

